

主張

## 学校の「体力」の強化に向けた働き方改革への取組

大芝 静香



令和五年八月に「教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策」が中教審から提言され、これまで躊躇していた部分にもいつそうの取組が求められています。

各学校においては、これまで必要と思われてきたことであっても、抜本的な見直しを行い、業務の縮減に努めてきました。当初は学校の「贅肉」を落とす効率化を図ることを主体に実施してきましたが、それだけでは十分ではないことから、「骨格」や「筋肉」に当たる部分にまで見直しを行い、縮減を進めていく必要があります。贅肉と筋肉を適切に区別することはもちろんですが、必要な骨格や筋肉を削りすぎてしまえば、学校の「体力」の低下につながることは自明の理です。これまで、学校は体力以上の重荷を背負っていたため、それを下ろし、本来の姿に戻ろうとしています。が、「本来の姿」が何なのかを今一度確認して、今後のやるべきことを見極める必要があります。

学校の「体力」とは、「学校力」と言い換えることができるでしょう。その概念は、一九七〇年代のOECDの会議で取り上げられ、「学校力」の高い学校とは「質の高い教育活動を展開して、児童・生徒への質の高い教育効果を上げている学校」と定義されました。この定義では、学校力の向上のためには、①教師の授業力を高めること、②優れた教



育計画（教育課程）を用意すること、③効率的な学校運営を展開すること、の三点が課題であるとされました。平成十七年十月の中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」においても、「教師力」「人間力」などとともこの言葉が示されています。

管理職は、自校における学校の骨格や重要な筋肉部分はどこか、削ってはならないところは何か、どこならば削れるか、他のサポートにより成立できるか、などを適切に吟味した上で取り組む必要があります。また、学校の「体力」づくりには、学校を構成する一人一人がトレーニングにより力を付けていかなければなりません。事務スキルや対応力などを高めることで、相対的に業務にかける時間が短くなり、同じ時間で教材研究や授業準備、研修等にあてる時間が多く取れることになるなど、働き方改革に直結します。

二〇二二年八月の「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」では、校長に求められる資質・能力について、人材育成やマネジメント能力に加え、アセスメント能力、ファシリテーション能力の必要性について示されています。これらは、管理職だけでなくミドルリーダーにも必要な力です。リーダーは教職員に対して、OJTを計画的に実施するとともに、自分に必要な力を理解してOJTやSD（自己啓発）に自ら取り組むことができるよう、まさに「学びに向かう姿勢」で自らの資質・能力を高めていくことができるように仕組んでいくことが求められます。

それらを高める取組は、教師のウェルビーイングを高め、子供たちへのよりよい教育となつて還元されていきます。このことが学校の「体力」の強化につながることも、教職員の前向きで活気に満ちた姿は、これから教師を目指す若者の共感を呼び、目の前の子供たちの「学びに向かう姿勢」を育むグッドモデルになるのではないのでしょうか。

（全日中副会長・茨城県水戸市立第一中学校長）